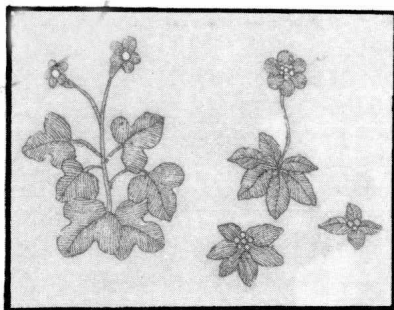




不吉な港

結城信一



新潮社版



不吉な港 ふきょうなみなと

お茶の水図書館蔵書

一九八三年一〇月五日 印刷
一九八三年一〇月二〇日 発行

定価一〇〇〇円

著者 結城信一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一 一六二

電話 業務部 (03) 三六二五二
編集部 (03) 三六一四二

振替 東京 四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替へいたします。

印刷 二光印刷株式会社 製本 株式会社大進堂
© Shinichi Yuki, Printed in Japan 1983

ISBN4-10-339702-0 C0093

不
吉
な
港

一九五二年 晩夏

その夜、酔ひはじめて半ばとろんとした眼を寄せてくると、星野思郎はささやくやうに言ひだした。

「軽井沢に、がたびししてしまつたけど、小つぼけな家があるんです。戦争中は疎開してゐただけど……、今年の夏、遊びに来ませんか」

久しぶりに東京を離れたい、と星野思郎が言つてゐたことを、名取は、ふと思ひだした。

「別荘、ですか」

「そんな、しやれたもんぢやないけど」

「軽井沢、ねえ」

「やつぱし、だめですか」

「とんでもない、だめどころか」

軽井沢へは、戦前にも、戦後も七年になるが、一度も行つたことがない。

星野と直接識合つてから、まだ日も浅かつた。この三年ほどの間に、銅版画の詩人と謳はれるやうになつた星野は、名取より四つ年下で三十二歳の若さだ。

「ただ、お招びしながら、わるいんだけど、小さいのが二人来て、三人で暮らす約束があつて、それでも構ひませんか」

小さいのが二人、といふのは高校生と中学生の、いずれも女の子で、長兄の子供たちだ、と言つてから、

「その代り二人には、おさんどんをやつてもらふことになつてゐるから、ぜひ来て下さいよ。夏は、がたがたと仕事なんか、しない方がいいでせう。それとも名取さんは、忙しいのかな」

お膳立ては揃つてゐる、いい機会だから、信濃追分も見てきたい、と思つてゐると、

「それから、もう一つあるんです。栃木に、岡安恆武といふ詩人がゐて、こんど詩集を出します。挿絵の方を、もう二年越しに頼まれてゐるので、八月のはじめに栃木へ、どうしても行かなければならないんです。それで、ほくが軽井沢へ行くのは、十日過ぎになつてしまふ。それでも構ひませんか」

星野はさう言つてから、

「ほくも、もつと落ちついて、いい仕事だけやつてゐたいんだけど、いろんな事情で、ついカットの仕事なんか引受けちゃつたりして、無駄な時間をつぶしては後悔してゐます。ほんたうに、仕事をしてゐないと、なんとなく寂しくて、とてもたまらない。……」

八月の中旬になつて星野から、軽井沢の消印がある手紙がとどいた。

その後お元気ですか。予定通り十一日にこちらへ参りました。大変涼しくてなにか仕事が出来さうですが、当分のんびり暮らすつもりでをります。先日の音楽会の帰りには色々御馳走になり、どうも有難う御座居ました。

こちらは音楽が聴けないのでちよつと困りますが、それでも静かで仲々気分は良好です。もしお仕事にきりがつきましたら一度いらつしやいませんか。なんにもお構ひは出来ませんけれど、油屋は満員ださうで予約しないと駄目かもしれませんが兎に角気が向いたらこちらへお越し下さい。

ほくもこの三年間無我夢中で仕事をして来ましたが、鎌倉の展覧会を最後にもつと純粹な自分の本当の仕事をしてみたくて仕方がありません。あまりむきになつてもいけない

いとは思ひますが、なにかもつと誠実な仕事をしたいのです、苦しいことですが。

こちらはもうすっかり秋のけはひで、朝晩は寒いくらゐです。お目にかかれるのを楽しみにしてをります。お元気でありますやうに。

……つづいて、短い葉書がとどいた。

お手紙有難う御座居ました。東京はまだ暑いさうで大変なものと存じます。こちらはこの二、三日は可成り暑いやうです。二十二、三日頃来て下さる由大変嬉しく存じます。時間をお知らせ下されば駅まで迎へにまゐりますが、もし面倒だといけませんから略図を左記いたします。ではお待ちしてをります。

二十二日、九時十分上野発軽井沢行の準急に乗ると、午後一時に終着駅についた。

乗客の中には、そのまま草軽電気鉄道に乗替へてゆくものがかかなり多く見られたが、名取は駅を出ると、略図をたよりに千ヶ滝行のバスに乗った。こちらの客は、意外に少なかつた。

六本辻で降りると、ニューグランド・ロッヂ入口の標識がある。その矢印とは逆にあるいてゆくと、「星野 一六六四」の白い立札が見えてきた。

このあたりは、杉、樅、落葉松の木立が混んでゐる。葉末から、涼気が滴り落ちてくる。玄関と、その奥の洋間らしい部分の外壁が、白一色であつた。入口に立つて声をかけたが、誰もゐない。明け放したままの玄関の中にポストンバッグを置くと、名取はバスの停留所に戻つてきた。

六本辻は放射線状に延びた六つの道が交差してゐるところで、緑の眺望がいい。夏の終りで、静かにひっそりとしてゐる。大気の純度がちがふ。軀が軽く思はれてくる。いいところに住んでゐる、と名取は呟いた。

あたりの風景をこまかく見究めぬうちに、向うから、女の子を乗せた自転車で星野の姿が見えてきた。

「駅まで、行つてみたんだけど」

星野は眼をかがやかせ、微笑を浮べながらそのままペダルを踏んで、白い壁の方に消えた。

名取が洋間に案内されて、籐椅子に腰をおろすと、まるで一瞬のやうに、クリーム入り

の冷やした珈琲がはこばれてきた。

「疲れたでせう。でも、うれしいな。風呂をわかつてあるので、汗を流しませんか」

思ひもよらなかつた。

あるきかけたとき、もう一人の女の子が、白いショートパンツで帰ってくるのが見えた。

風呂場から戻ると名取は、ボストンバッグからウキスキーの角瓶、コンビーフの缶詰、少女たちへの菓子などをテーブルの上に積んだが、星野は角瓶を見ると、眼を細めた。

「いいものを、もらつたなあ。ここへ来てから、一滴も飲んでゐないんです。なにしろ、加奈子や李江子がある。それにふたりとも、カソリックの学校だし、ほくだけ酔つばらつてゐるのは、やつぱし不味いですよ」

カソリックの学校だから、アンドレ・ジイドを読むことは禁じられてゐるらしい、といふ。

姉の加奈子は乗馬が好きで、一年中の小遣を蓄めて、夏はここで馬を借りるのが楽しみだ、妹の李江子の方はテニスで、クラブに一期分、つまりこの夏いっぱい分千五百円を納めれば、テニスコートで遊べる、といふ。

白いショートパンツで先刻帰つてきたのは、妹の方だらう。

「おなじ姉妹でも、性格も生活態度も、ぜんぜん違ふから、見てゐると結構おもしろいなあ」

加奈子はここへ来ても教会に行く、加奈子にはどうも苦勞性のところがある、などと言つたあと星野は、名取を散歩に誘つた。

高原の大氣が快く肌に沁みてくる。風呂の後ばかりでなく、奥行の深い落葉松の林の、長い隧道の中をあるいてゐるかららしい。

旧道に出て、郵便局の角を右に折れると、テニスコートの脇に出た。

白いショートパンツが、木洩日の中で光つてゐた。李江子が、友達とテニスをしてゐる。

……

李江子の軽快な動きを眼で追つてゐるうちに、名取の胸に、不意に昔の少女が甦つてきた。……昭和十年代のはじめ、学生だつた名取は李江子とほはおなじ年頃の少女にめぐりあつた。その少女は名取にとつて、やがて、自分は愛してゐる、それは自分が男で、このひとが女だからではない、このひとが第三の性に属し、自分は第四の性に属するやうな気がする、といふやうな關係に近づいてゆく。

名取は二人の愛のかたちを、百五十枚の小説にまとめ、昨年四月の文藝雑誌に発表したばかりだ。

発表後しばらくして、ひさびさに田園調布の岡画伯を訪ねてゐる。田園調布は、名取のゐる町の駅から、三つ目である。

岡鹿之助の名は、戦時中から知つてゐた。

戦争末期に、荷風の作品を、名取は集中的に読みふけた。その中で、荷風が岡鬼太郎の仕事に、しばしば大きな讃辞を贈つてゐるのが気がかりになり、古本屋をあちらこちら探してゐるうちに『鬼太郎脚本集』二冊本にめぐりあつた。第一巻第二巻ともに五百頁をこえる天金クロス装の美本で、大正十五年（一九二六）の発行である。

ひとつのめぐりあひは、時として、もうひとつのめぐりあひを呼ぶ。

名取は昭和十八年（一九四三）発行の鬼太郎著『歌舞伎眼鏡』も手に入れたが、この本の装幀者が、鬼太郎の長男である岡画伯であつた。

鬼太郎本とのめぐりあひは、岡画伯そのひととのめぐりあひにまでつながつた。

名取がひさびさに訪ねたその日、岡画伯は愉しさに笑ひながら言つた。

「このあひだ星野さんから、いつ名取さんに会はせてくれるんです、と文句を言はれまし

たよ」

岡画伯のお膳立てを、星野が強く期待してゐるやうにきこえてきた。

「面白い銅版画の作家がゐましてね、若いひとだが素敵な作品をつくるんです。しかも、まるで安い値段で売るんだから、びつくりする」

岡画伯はそんな風に、はじめのころは星野思郎の名前は出さず、面白い銅版画の作家、不思議な魅力のある銅版画の新人と言つたりしてゐたが、名取は昭和二十五年（一九五〇）の第二十七回春陽展で、初出品の九点を見てゐる。

そのうちの、自画像とも見える「孤独な鳥」は、春陽会賞を受賞し、つづいて翌年の春陽展では、出品数もふえて十二点だつたが、「束の間の幻影」によつて、星野は会員に推挙された。

その春の或る新聞は、四人の画家に頼んで春陽展・国画展から「ベスト3」を選ぶ特集を組んだが、二科会の鈴木信太郎は星野思郎をとりあげて、星野氏のエッチング諸作は日本人の感覚に一寸類のない美しい夢が神経のこまやかな技術の中に表現されてゐるのに感心した、と書き、新制作の佐藤敬は「夜の魚」一点をとりあげ「夢の連作」の一つであるが、まことに詩情と造型の美しい結びつきで、作者の誠実さに打たれる作品であつた、と

書いてゐる。

別の新聞では今泉篤男が、フランスから送つてよこした長谷川潔の清潔を極めた版画と、星野思郎のきめのこまかい叙情のエッチングはこの会の愉しい作品である、と書き、また別の新聞では富永惣一が、星野思郎のエッチングに密度の濃い観照を楽しむ、と書いた。星野作品はおほむね好評を得たが、春陽展での最初の九点、次回の十二点といふ数の入選も異例なら、準会員を素通りして、いきなり会員に推挙されるといふことも異例であつた。

そのころ岡画伯は、名取に語つたものだ。

「小杉放菴が絶讃してくれましたね、どうだい、おれだつて絵がわかるだらう、などと放菴先生一流のおまけまで附いた」

これも、異例のことかも知れない。

そして「束の間の幻影」は同年、第一回サンパウロ・ビエンナーレで、齋藤清の木版画とともに受賞する。

この幸運な作品に、逸早く注目したのは佐藤朔である。会場に出品される前の、刷り立てを星野のアトリエの壁に見たとき、次のやうに書かずにはゐられなかつた。

△空中に、サイコロのやうなウキスキークラスのやうな、円錐形のトランプのやうなものが、沢山浮んでゐる。黒いバックの上に、白く、耀いたものが、明確に、また朧な輪郭をもつて浮き上つてゐる。そのとき私には画題なんかどうでもよく、ただそこに結晶の華を見出してゐたのである。画家の創り出した、黒と白の、映像の結晶である。これは雪の結晶のやうに、動き、耀き、たまゆらに消え去りさうな気がし、美と幻想のふしぎな世界へ、人を誘つて行く。▽

これは「束の間の幻影」に寄せたものにちがひないが、このやうな卓抜の文章を書く佐藤朔は、更に星野作品の本質に迫つてゆく。

△「夢」と題する連作がある。これは星野さんの代表作であり、この銅版画家の創造の世界をもつともよく示すものであらう。初めに眼の表面に映つた、いくつかの形がある。その内のあるものが、途方もなく、ひろがり、大きくなり、或は魚になり、或は鳥になり、ゆがみ、くづれ、光り、破裂して、他の形が生れる——といった、夢のメタモルフォーズを、つぎつぎに美しく、妖しく、展開させてゐる。▽

△夢のシリーズを、はやばやと「代表作」と看破した佐藤朔は、おそるべき炯眼と直観のひとだ、と名取は驚嘆した。

「いつ会はせてくれるんです」

岡画伯に星野が文句を言つてゐたといふ話は、長いあひだ名取の心に残つた。

岡画伯の画室で、はじめてバルトークの「弦楽器と打楽器とチェレスタの音楽」を聴かせてもらつたとき、そこにプリマ・バレリーナの谷桃子がゐた。「火の鳥」の舞台装置のことで、相談にきてゐた谷桃子は、バルトークを聴きながら、頻りに涙を拭いてゐた。

長時間レコオドと、そのためのプレイアーは、輸入品に頼つてゐた。「長時間レコオド」は、やがて「LPレコオド」「LP」と呼び方が定着する。十二インチのレコオド一枚両面で、ベートーヴェンの第五交響曲の全曲がきける、と岡画伯は言ひ、一枚で小一時間の演奏が可能の上に、この合成樹脂のなめらかな盤から流れ出る音色は澄明で針音がなく、ときに音楽会にゐるやうな錯覚をおぼえる、といふ。

再生装置はやがて、広い画室の両奥から、画室いつばいに音が鳴りあふステレオに変つてゆく。

いつとはなしに「画室の音楽会」と招かれた人たちのあひだで称ばれるやうになつた、さういふ一夕を二人のために設けてほしい、と星野は言ひたかつたのだ。

「ひとりだけで聴いてゐるのは、惜しい。あなたがたのお蔭で、ほくも一緒に聴ける」